寒などを無形の病と分類しある程度中国伝統医学の概念を肯定しているが，有形の病である伝染病では従来の理論は通用しないと否定している点が特徴的である．

（平成22年4月例会）

書籍紹介

水谷惟紗久 著
『18世紀イギリスのデンティスト』

近代日本の医学・医療制度はドイツを範として創始され，その後は独自の発展を遂げて現在に至っているが，歯科医学はアメリカの影響が強く，欧州からもたらされたものはそれほど多くはないと思われる．本書は，歯科医療の原点の一つが英国にあると考えて，18世紀における歯科医療が当時の英国の社会に，どのように受け入れられていたかを，新しい手法を用いて解明しようと試みたものである．

著者の水谷惟紗久は，本学会会員であり，本書の内容の一部は本学会においても発表されているが，現在は，日本歯科新聞発行の月刊『アポロニア21』の編集長をつとめているジャーナリストである．そして，本書に使用されている資料のほとんどは，著者の母校である早稲田大学図書館が契約している「The Eighteenth Century Collection Online: ECCO」と「British Newspaper 1600–1900」等の電子データベースにより，検索したものに基づいており，電子ライブラリを活用したものとのことである．

本書の内容は，巻頭に18世紀のイギリスと世界の関連年表が掲げられ，第1章　美的欲求に応えるデンティストの登場，第2章　歯が「死」に関連していた時代，第3章　18世紀資料に見るデンティストの諸相，第4章　歯科口腔領域に関する書物，第5章 「近代外科技術の父」の書から知るデンティストの業務範囲，第6章　歯科外科医，シュバリエ・ラスピーニのビジネス，第7章　そして，日本の歯科医療はこれからどこに行くのか，となっている．参考文献として，巻末に114編の論文が収載され，さらに付録として2編の資料がつけられていると言った盛り沢山の本になっている．

最初に，18世紀のイギリスにおいて，歯科医療関係者として「歯抜き」から「デンティスト」がどのように誕生したかを，当時の新聞等により明らかにしている．それは，疾病構造の変化が原因の一つと考察されていて，最初は歯が原因となって「死」に至る病気に対応していたものが，美容的な要求に応えるようになってきたこと等が述べられている．王室や貴族御用のデンティストが，副業として今でいう口腔グッズの販売をしていたこと等は，わが国においても口科医が歯磨きを販売していたこと等と重ね合わせると，興味のある事項であると思われる．また，当時のデンティストの広告や人名録などの記載から，都市部における多彩なデンティストの生活ぶりが推察できるとしている．しかし，現在の状況をみても，広告を出している者は，その職種の一部に過ぎないことから，これをもって全体を類推することは，少々無理があると思われる．

また，当時の一般啓発書の中に歯や口腔についての記述がみられ，庶民の関心が高かったことが示されているが，これも『養生訓』等と同時代であることと考え合わせると興味深いものがある．この時代には歯科口腔領域の書籍はそれほど多くは出されていないようであるが，その目次を見ると，オーソドックスに書かれていることが分か

る．本書に取り上げられている文献は，これまであまり紹介されていなかったものもあり，その意味では新しい手法を用いた検索法の意義が認められるといえよう．

このような18世紀のイギリスにおけるデンティスト乃至デンティストリーの状態を紹介したのち，現在のわが国の歯科医療の在りようについての考察を行い，いくつかの提言をしている．このことにより，著者がなぜ今，約300年前のイギリスの歯科医療について，分析を行ったかが明らかにされている．また，現在の著者の業務の中で取材した延べ数百カ所に上る歯科医療の現場から得たいくつかの知見が紹介されている．その意味で，18世紀のイギリスについての医史学的な考察が，現在のわが国における歯科医療に対する提言に活かされているといってよい．

最後に，感想と注文をつけておきたい．まず，多くの資料を駆使されている努力には敬服するが，その中のいくつかについて裏付けを取ってほしかったと思う．時空を超えた資料の跋渉から，そのすべてに証拠を示すことは不可能と思われるが，ジャーナリストである著者であるが故に，敢えてこのことを求めたい．次に，第6章と第7章の間には，約300年の時間が流れており，その間にイギリスではどのように歯科医療が推移したのか，また，現在ならびに将来のわが国の状況について触れるのであれば，現在のイギリスの状況はどうなのか，著者の用いた方法を駆使すれば，18世紀の状況を把握するよりも容易ではないかと思われるので，次の機会に期待したい．最後に，著者は歯科医療について造詣が深いことはよくわかるけれども，二，三の歯科医学的な誤りが見受けられるのは残念である．本書の執筆にあたって歯科医師の意見を徴したのかどうか．もし，聞いたのであれば，そのことに触れていないのは如何なものであろうか．

（宮武　光吉）

［日本歯科新聞社，〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-20-4，TEL. 03（3234）2475，2010年7月，A5判，224頁，3,800円＋税］

篠田達明 著
『日本史有名人の臨終図鑑　2』

篠田達明氏の精力的な著作活動には感心する．

本書は先にこの欄で紹介した同名の書の続編であり，第2弾である．前回と同じく，雑誌「歴史読本」に連載したものの集大成である点は変わりなく，総数70人の歴史上有名人の病歴カルテを公開するという形式をとっている．

名称も，入院患者が多くなったため，「れきどく」養生所から「れきどく」ホスピタルに昇格しているが，院長篠田氏である点は変わりなく，ただ一人で看護師兼，薬剤師兼，放射線技師兼，臨床検査技師兼，リハビリ療法士兼，介護福祉士兼，栄養士・調理師兼，その他もろもろを兼務して，病院のすべての仕事を切り回しておられるという設定は前と同じである．

表現には1人物ごとに見開き2ページをあて，右ページは，主人公の死亡年齢とともに，生涯を短く簡潔に語っている．一方，左ページは全面枠組で，共通した様式をとっている．大別して上下二欄になっていて，上欄は保険証をもとに病院受付が記入する受診者欄であり，下欄は医師が記入する病歴病状欄である．受診者欄には，氏名・生年月日・出身地・現住所・診療日・父母・職業など．病状欄はさらに分かれて，家族歴・既往歴・現病歴・現症・留意点および今後の方針・臨床診断名・担当医名の欄が設けられている．一見して明快，興味のある欄を見ればよい．担当医欄には，実際に治療にあたった医師がわかっている場合はその名前，それと必ず著者篠田氏の名前が併列されていて，他医の診断にとらわれず著者自身独自の見解を述べている点は好感が持てる．